

---

# おじゃまんマンション

水色/青空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おじゃまんマンション

### 【Nコード】

N2971A

### 【作者名】

水色／青空

### 【あらすじ】

彼女がいなくなつて3年……。でたらめな管理人と彼女に振り回される可哀想な住民たちのドタバタマンションコメディ。

## プロローグ

3年前、叔母が消えた。

叔母といってもまだ若く、たぶん今は20、21くらいの年だろう。若いがゆえに消えた理由も単純だった。

夢のため。そのために彼女は消えたのだ。

なんの夢だったかは知らないが、とんでもなく迷惑な夢だということとはわかる。あの人の性格からしてそんなカンジだろう。

はちゃめちゃで、台風のような人だった。彼女との思い出はどれもイタイものばかりだった。私が5歳のとき、彼女と私達家族が山登りをしたときも、私が彼女を信用したため、2人そろって遭難し、わけのわからん宗教団体にお世話になったという記憶がある。あとは、8さいのころに宇宙人との交信に夜中まで付き合わされたり、  
.....もうキリがない。

だが、私は彼女に対し、感謝してもしきれないほどの恩がある。何年も前のことだ。彼女はとうの昔にわすれてしまったに違いない。でも、私にとってはとてもありがたいことだったのだ。

だけど私は礼をいわなかった。いや、礼どころか文句もいえなかった。

翌日、彼女はいなくなっていたのだ。

## プロローグ（後書き）

初めてなので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

## 第1階・おじやまなヒーロー（前書き）

少し長いかもしれませんが、一応連載モノです。

## 第1階・おじやまなヒーロー

あのと、彼女は確かにこう言った。

「3年後にね、内地（大和）であるマンションが建つの。そこでね、管理人募集してるみたいなのよ。……いいわよね、管理人。おもしろそうだわ」

キラリと彼女の目が光ったのを、私は見逃さなかった。

《おじやまんマンション》

2、3ヶ月前に建ったばかりの、何故かあやしいと噂があるマンション。

別に古くさくはないのだ。きれいで立派なマンションだ。

だが、夜な夜な女の怒鳴り声や、ガガガとか、バキベキツとか変な音がマンションから聞こえてくる。たぶん噂の原因はこれなのではないかと思われる。

そんなところに、昼間から3つの影が入っていった。

「普通のマンションやし」

なまりのあるイントネーションで、ショートカットの女の子が周りを見渡す。

「だけど、なんだか薄暗くない……」

きれいな黒髪の女の子が、引きつった顔でつぶやくと、

「あっ!？」

金髪の子が、なにかを指差し声をあげる。

「なななな、何!！」

「うそ」

外人の様な女の子が、ニヤリと笑った。

「うそでもいうな!！」

この3人、近所に住んでる中学生である。最近できたこの怪しいマ

ンションを、好奇心で見に来たらしい。だが、夜じゃ怖いので、昼に来たのだろう。

3人の名前を紹介しよう。

「もう、なんなのよ！だからあたしはいきなくなかったのにっ！つて、聞いているマコト？」

泉<sup>イズミ</sup> 亜紀<sup>アキ</sup>。大人っぽい顔立ちに、真っ直ぐで肩のところできれいに切りそろえられた黒髪。いかにもしっかり者、といったカンジの子だ。1番身長が高い。

「……………ゴメン、きいてなかったあ。もつかいいってえ」

比嘉<sup>ヒガ</sup> 周<sup>ムコト</sup>。ショートカットでパツと見は運動部系。だが、けっこう身長が低く、体重も一番低い。おとなしそうな顔のくせに、左耳に、陰陽の模様のイヤークラスを付けている。人の話を聴かないのと、なまりのあるイントネーションが特徴。

「あんたはなんのためにその耳があると思ってるの！？」

ボリ、ボリ、パリ、パリ。

「……………え？なんか言った？」

パクパク、むしゃむしゃ。

「あんたはもう！！……………って、花まだ食ってるの！？」

ポテチの食う音のするほうへ、亜紀が視線を向ける。

「え？うん。あ、一緒に食う？」

「……………いらないわ」

「お前が食うのを見てるだけで腹いっぱいだよ」

「？」

草切<sup>クサギリ</sup> 花<sup>ハナ</sup>。金髪の髪に、白い肌。おまけにキレイな透きとおった青い目。どっからみても立派な外人のこの子。1番身長が低く、食べてる割にやせている。

「どーでもいいから上にいこうさあ」

この一言で、3人は2階に行くことになった。

上にいくには、階段かエレベーターを使うのだが、もちろん普通は

エレベーターが良いに決まってる。が、

「もちろんエレベ―」

「階段!」

「……」

亜紀が声を張り上げる。マコトの声はあっというまにかき消されてしまった。

「エレベーターなんてそんな、あんな四角い密室された箱の中でなにかあったらどうするの? 逃げられないじゃない!!」

「亜紀、……怖いん」

「怖くないわよ!!」

「いや、だったらエレ」

「エレベーター? ばつかじゃないの!!」

「階段でいくほうがバ」

「階段!」

亜紀がマコトの声をさえぎる。

「いや、わかったからさ、マコの話最後までき」

「よし!! 階段でいくぞ!!」

花が、声を張り上げた。

3人がいった、その数十秒後。

「京子、京子……あれ、京子いないの?」

反対側の階段から、ひょこつと長身の青年が現れた。

「いないじゃない、来て損したわ」

後ろのほうから、さっそうと、茶色のふわふわウェーブの髪をした女性も現れる。

「いや、確かに女の子の声がしたんだって」

「馬鹿いわないで。空耳じゃなくって?」

何かと毒舌な彼女の名前は北宮 キタミヤ 梓 アスサ。その優雅で気品にあふれる彼女のふるまいからして、どこかのお嬢さまだと思われる。

「ぐ、あ、そんなはずはないんだけどお」



若干へたれている彼は石川<sup>イシカワ</sup> 宇宙<sup>ソラ</sup>。身長はけっこう高いし、顔もなかなかのだが、そのへたれで台無しである。

「いいから早くホールにいきましょう。管理人の女がまたなにかたくらんでるんだから」

「あ、そうだった。でも京子が」

「ああ、もう！いいかげんになさいっこのシスコン！！」

ガン！まさかこんなにはつきりいわれると思わなかった宇宙は、まともにショックを受けた。

「そ、そんな、ひどっ……」

「ああ、めんどくさい！なんで下った階段上んないといけないのよ！！（きいてない）」

そういうと、梓はさっさと上へ行ってしまった。

「この階段、……長っ！無駄に長い！！」

「うっさいわね。だいたい花は体力なさすぎなのよ」

騒ぐ花に、亜紀はうっとうしそうに言った。

「おい、もっと早く行かんばあ？」

「うっさい、死ね」

「なんで!？」

2人がキレるのも無理はない。ここの階段は異常に長いのだ。かれこれ10分、15分歩いているのに、全く出口が見えない。体力のない花はあまりのキツさに無駄にテンションが高くなっていた。

「テンションが上がったっていうか、S度増してるっつか……」

マコトのためいきにすばやく花が反応する。

「はあ、何アンタ？自分がめちゃくちゃ体力あって運動神経いいこと自慢してんの？うぜえよ、カス。ふざけんな、もうアンタは消えなさい。火葬とか土葬とかの前に海に沈めてやるってんだよ、沖縄の海に沈みてえのか？ああ？このウチナンチュイントネーション

が」

「何でええ?!この子もウドSじゃん!!マコなんかしたつけ?」

「うるせえ!運動神経いい奴がム力つくんだよ!!」

「逆恨みかー!!」

こんなどうでもいいことにインネンつけられ、マコトはいい迷惑である。はつきりいった話、悪いのは亜紀なのだ。亜紀が階段といわなければ、花はこんな目にあわなかったのだ。が、

「……花、もうすぐ着くからだまって」

それに対し花は、いままでのS的態度を改め、

「うん、わかった。だまってるー」

そうになると、なっとくいかないのはマコトである。怒りのあまり、思わずなまり丸出して怒鳴った。

「ええ、まてまて、ええ!(沖縄の人は怒った時くええ!>という)ヤーは(お前は)なんで亜紀とマコでは態度違うば?マコ何もしてないやつし!てか、亜紀のせいやつしコレ!!意味わからん!!なんだよ!!」

「死ね」

「だからなんでマコにはSなんだよおお!?ええ?!」

「うつさいわね!!!だまってなさいっ!!」

そんなこんなで、にぎやかに3人は2階に着いた。

2階には、色々な部屋があり、ほとんどがまだ空き部屋だった。やはり中はキレイで、あの噂のマンションとは思えないほどだった。そして、少し行ったところに《ホール》と書かれた部屋もあった。

「ホール?」

「あ、それ知ってるー!」

マコトがうれしそうに声を上げた。

「マコのおばさんが消える前にいったんだけどな、ホールってここは、住民が集まって色々するとこなんだってさ」

「へえ、あの噂の叔母さんが」

「物知りの叔母さんね」

亜紀と花が、マコトではなく、さりげなく叔母のほうに感心した。

「いや、物知りつつーかさ、叔母さん、なんでか管理人の職業にあこがれたつつーか」

「は？管理人？」

わけのわからん夢をもっていたマコトの叔母に、亜紀と花は思わず聞き返した。

「うん。消える直前にいつてただけだし、3年後に本土でできるマンションが、あ、たぶんこの近くらしいんだけど、変わった管理人を探してるとかで。まあ、アノ人も相当変わってるからねえ」昔を懐かしんでる年寄りのような目でマコトがつぶやいた。

「この近くなら行けば良いのに」

「うーん、3年前の話で、3年後にできるマンションてったら今年建ったってことっしょ？この近くで今年建ったマンションなんてあったけ？」

マコトが首を傾げて考える。

「ない、ない」

「……おじやマン以外ないわ」

「だよな」

やっぱりないじゃん、と、マコトと花は笑った。そんな2人に亜紀がもう1回だけ、答えを言う。

「いやいやいや、だから、ないんだって。おじやまんマンション以外。つーか、ここだよ」

そして、はっとする。

この近くで、今年建ったばかりのマンションはない。

ここ、おじやまんマンション以外は。

「……いや、違う。きつと3年前マコは聞き間違えたんだ」  
「そうね、きつと隣の県ぐらいのマンションのことをいつてたのか」

もしれないわ」

とかいいながら、明らかに動揺しているマコトと亜紀。

「でも当たってたらウケルよね」

「だまれDS」

花は、思った以上になにもないこのマンションに退屈していた。これはいい退屈しのぎになるといわんばかりに、ニヤニヤし始めた。

「とにかく、ホールにいつて誰かにきいてみようさあ」

「そうね。でもマコト、あなた今すごいなまってるわよ」

あせってんのか、動揺しているのか、自分でもなまっているのに気づいていない。

「なにいつてるば、ちょっとしかなまってるないさあ」

「なまってるって」

「なまってるないさあ」

「それがなまってるんだよ」

まるでB級コントである。

そして、汗だらだらのままことを引きずって、3人はホールへと歩いた。

たぶん、この中にはだれか人がいる。その人達から聞けばいい。それにここは思ったより悪いところではなかったし、もしこの管理人がマコトの叔母でも、そんなたいしたことではないのだ。なんてったって、3年ぶりの再会になるんだし、普通に感動の再開になるだろう。

マコト以外の2人は、その程度にしか思ってたなかった。

「花、開けて」

ぐったりしているマコトに肩を貸している亜紀が、花に頼んだ。

「OK、入るよ！」

花が勢いよく扉を開ける。

その中には、2つの黒板、伝言板とかかれたものと普通のやつが

並んでおいてあつて、大きなテーブル1つ、イスが何個かおいてあった。かなり広い部屋だ。

その部屋の中心に一人、彼女は立っていた。

赤い仮面を被った彼女は、仮面以外はただの女性だっただろう。だが、彼女は素顔を見せることなく、そのマジレドの仮面を被ってそこにいた。

「おじゃマンレッド！参上！！」

レッドと名乗ったそれが、勢いよくテーブルから飛び降り、3人の前にきた。

「……は？」

「……！！」2人とは対象的に、ぐったりしていたマコトが、びくつと動いた。

その声には、聞き覚えがあつた。

「！！」

梓が顔をぱつと上げて、険しい表情をした。

「梓？」

「あの管理人の声だわ」

忌々しそうに梓がつぶやいた。

「ああ、じゃあホールかな」

冷静に宇宙が言った。

「早く行かないと！」

「おちつけて、動くだけ無駄だよ」

「なんですって！？」

冷たく言い放つ宇宙に梓は怒って振り向いた。だが、お人好しの宇宙がここまで言うのも訳があつてのことだった。

はあ、と大きいため息をつき、宇宙は改めて周りを見渡す。

「動こうにも、閉じ込められちゃ動きようがないよ……」

「うつ……………」

さすがの梓も、これには反論のしようがなかった。

今、2人は階段の踊り場で……………檻に閉じ込められてた。

「私としたことが……………うかつだったわ!」

「そうだね、かおるさんの罠にはまるなんてすごい久しぶりだね」

「私は昨日も引つかかったわ!」

「だめじゃん」

とにかく、2人は大声で助けを呼んいくことにした。

「ちよつと、2人?私も、てこと?冗談じゃないわ!呼ぶのは宇宙よ!」

「お前やれよ!」

亜紀は思わずこめかみを押さえた。

この状況は、14年間生きてきた中で、どうリアクションしていいかわからないベスト10の3位以内には確実に入ってるであろう状況だった。

ちなみに、当の本人であるレッドは、

「……………」

亜紀たちのリアクション待ちだった。

「……………うわぁー」

「さんざん悩んでそれ?」

「これ以上のリアクションは無理です」

「もつとバリエーションにとんだリアクションを身に付けなさい」

「……………」

この人は、ふざけているのだろうか。

めまいがした亜紀は、バトンタッチの代わりに、マコトに視線で合図をした。「……………?」

が、当のマコトは、

「……………」

マコトはじーっとレッドのことを穴が空くほど見つめていた。

「あ、あのっ！」

そして、腹を決めた様子で、勢いよくしゃべりだした。

「つかぬことをお聞きますが、＜安谷屋 かおる＞という名に身に覚えはありませんか？」

「つかぬことも何も、どうみても本人じゃない」

「……」。マコトの体からドツと冷や汗が滝のように流れ出す。  
「ず、ずいぶんと真つ赤なお顔になられられ……」

「3年前より日本語下手ね」

だんだん顔から血の気が引くマコト。隣にいる亜紀にも、すべてわかった。

つまり、彼女はマコトの……叔母なのだ。

バーン！！突然ホールのドアが開く。

そして、

「ちょーっと、まったああ！」

今度は、ピンクの仮面の、声からしてマコト達と対して歳が変わらないであろう女が飛び出してきた。

「……さっさと名乗って」

疲れた表情で亜紀が言う。

「ええ！？ヒドっ！まあいいわ。あたしの名前はおじゃマン仮面ピンク！ところでレッド、自分の名前勝手にばらさないでよー！」

だが、そんなピンクを軽く無視し、カオルはしゃべり続けた。

「あなたもずいぶん変わったわね」

「え、あ、はあ、……まあ一応」

昔の話を振られ、とたんに口をにがらすマコト。

「きけえー！」

「さすがね、人の話を聞かない家系なのかしら」

あきれを通りこして、感心する亜紀。ぶっちゃけ内心ではどうでも

よくなっているのだろう。そんな亜紀のとなりで、明らかにイライラしているピンク。仮面で顔を隠しているのに、ここまで喜怒哀楽を表現してしまう彼女はスバラシイ。

「あ、そうそう。それであなた達に渡したいものがあってきたのよ」突然そんなことを言い出すカオル。

「大丈夫、変なものじゃないわ」

とてつもなく優しい声でカオルが言う。

「……はつきりいつて、信用できない。」

嫌な予感を人間の第6感でかんじつつも、2人は慎重に答える。

「見るだけ見ます。……もらうかどうかは後ですよ？」

「……とりあえず、何なんですか？」

「えーつとね……」

「……」

がさごそとあらかじめ用意してあった袋から、カオルが何かを取り出す。

そして、その取り出したものは……？

「これよ！ー！」

「……」 「……あー」

おじゃマンイエロー・ブルー。

「いるかああ！ー！」

切れた亜紀。

「あら、どうして？」

「……どうしてもです」

切れる亜紀をなだめつつ、これ以上騒ぎを大きくしないように、不思議そうに聞くカオルにさりげなくマコトが断った。

「残念だわ……。あなた達2人が入れば5人そろったのに」

本当に残念そうにカオルはつぶやいた。

「そんな遊び、とんでもない馬鹿以外やらないわよ」

「？ちよつとまって亜紀。カオルさん今、＜あなた達2人＞て言うてなかった？」



マコトはわかった。そう、奴がない。

「え？わたしと、あなたと、花と……。あれ！？花は！？」  
「……さつきからいないってば、あのだS」

嫌な予感がビンビンする2人。あいつに限ってそんなこと……  
・つてのはない。あいつだからやりかねないのだ。

「できないさい、おじゃマンホワイト！」  
カオルが高らかに叫ぶ。

「おじゃマンホワイト！参上！！」

「「花あー！！」」

「おっす」

おっすじゃねーよ。てめ、今なにやってんだよ。なんで白い仮面被ってんだよ。

怒りを抑えつつ、亜紀が聞いた。

「わざと仲間になったわね……」

「もちろん！！」

ブチッと亜紀のこめかみから何か聞こえた。

「あゝ、梓？」

「なによ」

「いくらなんでも、これはないよね？」

「あたしのせいっていいたいの！？」

「お前のせいだろっ！」

全身水浸しの2人は、イライラモード全開で怒鳴りあっていた。

「だいたいクイズゲームなんてマシヨンにある自体おかしいのよ！」

「マツクのフルネームも知らない奴に言われたくないんだけど……」  
「……」

もちろん宇宙のつばやきを、梓はきいていない。

「じゃあ何！？あなたは知っているの？」

「マクドナルド」

「……………」

「も、もちろんしってたわよ！！」

「うそつけ！だから水浸しになったんじゃねーかよ！！」

「で、仲間にならない？」

「いや」

「今ならなんと、ゴールドとシルバーがもれなく無料！！」

「いやいやいや、いらないうて」

「無料？」

「じゃあどうしたいのさ！？」

「なにもしたくないわ。むしろ帰りたい」

「あゝ……腹減ったなあ」

「あたしだっておなかすいたもん！」

「で？」

とりあえず、話をもどそう。

しつこく誘ってるのが花。とにかく断っているのが亜紀とマコト。

「だいたい、さつきから正義のヒーローみたいなことしてるけど、

悪の軍団がいないじゃない。それじゃヒーローの意味ないわ」

亜紀がいいところに目をつける。確かに、ヒーローには悪がいないと成り立たない。

が、カオルは得意げにこの疑問に答えた。

「もちろん、悪の軍団くらいいいます」

「……？」

きいてないよ！といわんばかりにピンクとホワイトがカオルを見る。それでもカオルは1人で続ける。

「その名も、おじゃマンデビルです」

しらねーよ、そんなの！いやだよそんなダサい悪の軍団！！ピンクとホワイトは色々目で訴えたつもりだが、カオルには何一つ届いて

なかった。そして、カオルの説明はまだ続く。

「そう、そして、その悪の軍団は、  
あなた達です!!」

「はああ!？」

いきなり指をさされて、キレることしかできない2人。

「ちなみに、名前は怪人ツッコミとウチナンチュなまりです」

「つつこみ！？私だっ  
て好きでつつこんで  
るわけじゃないのよ！  
！」

「ウチナーンチュ？なまり？だから全然なまってないさあ！」

「ぴつたりだね」

「だまれ裏切り者」

怪人ツツコーミとウチナーンチュなまりはホワイトに向かって切れた。

そして、カオルがマコト達に向かって指をさし、叫ぶ。

「さあ、倒しなさい！ピンク、ホワイト！！」

「ウキー!!」

2人にむかって突っ込んでくるピンク達。

「うわっ、その掛け声はだめだつて!!」

「てか、あんた達のほうが悪役っぽいんだけど!!」

良い子も悪い子もだめな子も、こんなヒーローはいけません。最悪です。

「覚悟おお！」

が、

「ちょーっと、まったああ!!」

バーン！と、またホールが勢いよく開く。

「その馬鹿げた遊び、ストップ！！」

飛び出してきたのは、茶色いふわふわの髪の人と、げっそりと疲れた顔の男の人だった。

「いい加減にしろなさい。こんな無関係な子まで巻き込んで！」

良かった、まともな人だった。亜紀とマコトは心底ほっとした。これでもう安心だ。

すると、男の人がピンクのほうをじーっとみて、

「とゆーか、そのピンクの仮面の子、……………キョウコだよ  
ね？」

「あれ、おにいちゃん？」

キョウコ？

え？ピンク今、お兄ちゃんっていった？

マコトたちはわけがわからない。

ということは、どういうことだ？つまり、ピンクのお兄ちゃんがアノ人。そしてアノ人はピンクに言った？

……………キョウコ？

「ぎゃははは！！キョーコだってよ、キョーコ！！」（花

「……………キョウコ」(亜紀

「偽名ですか？」(マコト

「なによ、なにがいけないのよ！！本名に決まってんじゃない！石<sup>イシ</sup>  
川<sup>カワ</sup> 杏子<sup>キョウコ</sup>よ！悪かったわね！！！」

確かに、こんなイケイケな女が杏子というのは、あまり似合わない気がする。

「……………それで、梓さんと宇宙くんは何の用ですか？」  
カオルが口を挟む。

その質問を待つてましたといわんばかりに、梓がカオルをキツと睨む。

「何の用ですって？決まってるじゃない！あなたのその馬鹿げた遊びを止めるためよ！！」

「なら、戦いなさい」

「・・・・・・はあ！？」

あまりの唐突さに、プライドが高いさすがの梓も、どう対応していかかわからず、思わず間の抜けた声を出してしまった。

「まーたあの人は・・・・・・」

あきれた宇宙はこれ以上モノがいえなかった。

「ねえ、マコト？」

「なにさ、花？」

花が気になったことをマコトにきく。

「あんたにもあれと同じDNAがはいってんの？」

「・・・・・・ん？あ、ゴメンきいてなかった」

「・・・・・・（怒）」

「花、同じDNAよ。間違いなく」

そして、そのマコトと同じDNAをもつカオルは、梓との戦いのルールを説明していた。

「ルールは簡単、相手を戦闘不能にするだけ！肉体的だろうが、精神的だろうがかまいません。どうです、やりますか！？」

「受けて立つわ！」

始まってしまった。

真剣な2人をよそに、この遊びにあきてしまったホワイトとピンクは、もう仮面を取ってしまった。

さあお待ちかねのピンクの素顔は・・・・！？

「・・・・・・うわぁ」（マコト）

「ありえない」（亜紀）

「すっげえ・・・・」（花）

ピンクこと杏子は、真っ黒のポニーテールの髪をした、・・・・・・

すっごいおとなしくてか弱そうな顔をした少女だった。

「整形しました？」（マコト

「・・・あんなそれ天然？」

カオル達に話を戻そう。

2人はまだ1ミリも動かずに、睨みあっている。

ぴくっ

カオルが動く。

「・・・・・・・・・・！」

梓の顔がこわばる。カオルはすうっと息を吸い込み、口を開いた。

「梓・・・・・・・・・・」

「！？何ですか？」

「・・・・・・・・・・イケメンは、イケてる麺ってことじゃないのよ」

「えええー！！！」

勝負はついた。梓はついた。梓はショックのあまり、崩れ落ちてしまった。

カオルが勝ったのだ。

「ああ、知らなかったんだ。イケメンの意味・・・・・・・・・・」（宇宙

「きつと調子に乗ってあっちこっちのそば屋で使ってたのよ」（杏子

「てゆーか、イケメンってもう死語？」（マコト

「あほらし」（花

「帰ろう・・・・・・・・・・疲れたわ」（亜紀

杏子と宇宙に別れを告げ、3人はおじやまんマンションを後にした。

「けっきょく何しにきたんだっけ？」

「・・・・・・・・ほんつとに疲れた」

「叔母さん、何がしたかったんだろう？」

疲れた表情で3人は（たぶん花も）誓った。

もう、おじゃまんマンションに行くのはよそう……………

「ところで2人とも、青と黄の仮面いらない？」

「捨てるおお!!」

## 第1階・おじやまなヒーロー（後書き）

はじめての小説なので、わかりづらい点もあるかもしれませんが。  
何かいいアドバイスがありましたらぜひ教えてください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2971a/>

---

おじゃまんマンション

2010年10月12日21時21分発行